

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 ポーランド訪問～国と国をつなぐものとは～
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 113, No. 6, pp. 28-29
Citation(English)	INVENTION, Vol. 113, No. 6, pp. 28-29
発行日 / Pub. date	2016, 6



知財見聞録

ポーランド訪問～国と国をつなぐものとは～

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

日本外交官の足跡

昨年、大ヒットした映画『杉原千畝』をご覧になった方は多いと思う。幼少期から歴史が苦手だった筆者は、これまで杉原千畝という逸材を知る由もなく、映画で初めて知り、大きな感動に包まれた。今回は、この映画の舞台となったポーランドについて紹介する。

その前に杉原千畝について触れておきたい。杉原は、第二次世界大戦中、リトアニアの首都カウナスに日本領事館の領事代理として赴任していた折、当時、ナチス・ドイツに迫害されていたユダヤ人に日本通過ビザを発給し、多くの命を助けた人物である。

カウナスは、ドイツ占領下のポーランドをはじめ、侵略地域から逃れてくるユダヤ人であふれ、彼らの扱いが国際的な問題となっていた。

杉原は、日本国外務省からの指示に背いて領事館が閉鎖されるまでの残された時間の中でビザを発給し、ユダヤ人を救った。その勇気と人道性が、実は、今でも多くのポーランド人の心に残っているといわれている。

恩を忘れぬ熱いポーランド人

杉原に加え、日露戦争中、ロシア軍の捕虜となったポーランド軍人約4600人は松山市内で手厚く保護され、そのうえ日本がロシアを破ったこともあり、いまだにポーランド人は日本人に対する好感情を受け継いでいるという。

また、日本政府や日本赤十字社は、1920年代のロシア革命直後の混乱の中で親を失ったシベリアのポーランド人孤児765人を受け入れ、その後、祖国へと無事に移送したことも歴史の熱いひとコマになっているという。

一見冷静に見えても、「恩を忘れぬ熱いポーランド人」という表現がよく似合う情熱的で感情豊かな人々が暮らす国に筆者が生まれて初めて訪問したのは、2013年2月のことだった。

ポーランド特許庁への訪問

ワルシャワでは、真っ先にポーランド特許庁を訪問した。同庁は1918年12月28日に設立、1919年11月10日にはパリ条約に加盟している。日本のパリ条約への加盟は1899年であるからその差は20年だが、ポーランドも日本と同じ年代から知的財産権制度が始動したとみてよさそうだ。

最初の商標登録が1924年4月11日、最初の特許が同年4月24日である。ポーランドが遅れを取ったのは、なんといっても第二次世界大戦下におけるナチス・ドイツ占領時代から東欧革命による民主化までの期間。これがその後の発展を阻害していたようだ。

失われた40年を取り戻そうとの趣旨から、ポーランド特許庁は産業財産権の普及活動に注力している。当時、普及啓発を担当していたMarcin Gedlek氏と面談してきた。

同庁では各種の啓発誌を作成・配布しており、日本の発明協会が長年行ってきた活動を彷彿とさせる。短時間の訪問であったが、百聞は一見にしかずである。ポーランド特許庁に対するイメージを持つことができた。

特許法律事務所を訪問

特許庁の後は2カ所の特許法律事務所を訪問した。最初に訪問したOP Lawでは欧州単一特許に対する特許法律事務所からの視点について議論したが、そもそも出願件数が少ない国であるため、単一特許になると業務が縮小するのではないかと心配していた。

もう一方の KONDRAT IP Law は、日本事務所と連携を図りたいが、なかなかネットワークを構築できないのが課題とのこと。ポーランドには約300社の日本企業が進出しており、ポーランド工場で生産された製品がEU諸国へと輸出されている。日本企業が積極的に進出している理由は、ポーランドの安定した経済と国民気質にあるという。

なお、現地ではどうしても生産現場としての機能が重視されており、知財分野にまで目が届いていないようだ。

クラコウへ向かう途中で……

ワルシャワの次は古都クラコウに向かった。せっかくの列車移動だったので、一等席の特急列車に乗って東欧の鉄道を満喫してきた。

日本の新幹線ほどではないが、近代的で乗り心地の良い列車だった。一等席は向かい合わせで8人程度の座席が並んだ個室になっている。クラコウまでは約90分の旅であった。

車内では、ワルシャワの訪問先でとったメモを読み返していた。そして、あと5分ほどでクラコウに到着するころになって、年配の女性が声をかけてきた。筆者が持っていた書類を横目でのぞき込んだのかもしれない。

「日本の特許関係の方ですか？ 私はポーランド特許庁長官のAlicja Adamczakです」

この偶然には本当に驚いた。特許庁を訪問し、産業財産権の普及啓発活動の説明をしていただいたと報告したところ、Alicja長官は、つい数日前に日本出張から帰国したばかりとのこと。予期せぬ出会いに感動すら覚えた。

王国時代の首都である南部の都市クラコウは、ポーランドで最も歴史ある都市の一つ。街には今でもその歴史が感じられる建物が多く残っている。

中央市場では民芸品、街中の専門店では品質保証書付きの琥珀などの買い物に興じた。旧市街に点在する教会はどれも年代物である。教会で催されていた管弦楽コンサートも楽しんだ。

相手を思う心が世界との懸け橋

ポーランド人は日本語や日本文化に高い関心を示している。映画監督アンジェイ・ワイダ氏は、少年時代に見た葛飾北斎に感銘を受け、浮世絵を展示する博物館を造る夢を抱き続けた。

そして1994年、日本政府・企業等の支援を得て、浮世絵をはじめ、日本美術や技術を展示する「日本美術・技術センター」をクラコウに設立する。

さらに、ポーランドでは、日本研究や日本語教育も盛んに行われている。ワルシャワ大学をはじめ、多くの大学に日本語学科が設置され、日本語を学習する機会が増えているという。

現地でお会いしたシルビア弁護士も日本語を勉強中だと言っていた。そのわりに彼女は日本語を全く話さなかったが、遠く離れた文化も異なる異国の地でも、何か心に通じるものがあるような気がしてうれしくなった。

よく「グローバル化への対応」というが、競争力の向上ばかり考えていたのでは、世界の中の日本にはなれないのではないだろうか。

ポーランドでのさまざまな出会いを通して、心を込めて相手のことを思いやる気持ちと行動が国境を超えた人と人との深いつながりをつくっていくのだとあらためて感じたところである。



Mr. Marcin Gedlek



OP Lawのシルビア弁護士



OP Lawのヤコブ弁護士



KONDRA IP Lawのマリウズ所長・弁護士



古都クラコウの中央市場



毎晩、どこかで開催されるコンサート